

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

1 前年度 評価結果の概要	<p>・全職員が自己の指導を振り返り、次の実践に移すといった授業改善に取り組んだ。また、児童自身が目標を設定し学ぶ機会として「本庄検定」も試みた。学習状況調査では、4～6年生の算数科に大きな課題がある。引き続き学力向上の取組の重点化を図る必要がある。</p> <p>・特別支援教育に関する情報交換を定期的に行ったことが、教職員の共通認識の創出につながった。支援を必要とする児童が各学級に在籍していることから、研修等を通して、なお一層教職員の資質向上を図ってきたい。</p> <p>・校時の見直しによる成果は見られたものの、更なる業務改善が喫緊の課題である。教育実習や研究発表の在り方を再度見直し、より効率的な働き方を目指す必要がある。</p>
------------------	---

2 学校教育目標	自ら学び（知）、共に高め合い（徳）、たくましく生きる（体）本庄っ子の育成
----------	--------------------------------------

3 本年度の重点目標	<p>本庄コミュニティ・スクールとして地域・家庭との連携した教育環境を基盤にして、学校教育目標の達成向け、次の4点を令和6年度の重点目標とし取組を展開する。</p> <p>① 「自ら学ぶ本庄っ子の育成」のため、学び部を組織し、児童の学びに係る授業改善の実践研究と、教師の学びに係る教師研究の両面から両者の有機的、継続的な取組を追究、実践することで「子供も教師も学び続ける学校」を目指す。</p> <p>② 「共に高め合う本庄っ子の育成」のため、こころ部を組織し、児童の互いに思いやるの心を育てる取組を推進するとともに、全児童が共に安心して学校へ通える環境づくりを推進することで「居心地のいい学校」を目指す。</p> <p>③ 「共に高め合う本庄っ子の育成」のため、安心部を組織し、「挨拶・掃除」の場面に重点を置き、児童の体験的な活動を通して、児童が物事に対して自ら考え、他者の思いも尊重しながら判断、行動する自発性や自律性を伸ばすことができるようにする。</p> <p>④ 「たくましく生きる本庄っ子の育成」のため、楽しみ部を組織し、児童個々のよさや頑張りを自覚できる取組を推進することで「つながりの中で自信をもつ子」を育てる。また、自己の運動習慣・食習慣と向き合わせる取組を推進し、「いっぱい遊び元気な子」、「良い食習慣で健康な子」を育てる。</p>
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目				最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
				●学力の向上	<p>○全職員による共通理解と共通実践</p> <p>○算数科における授業改善</p> <p>○全職員による教科等指導力及び学級経営力向上に係る研修会の開催</p>		
●心の教育	<p>●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動</p>	<p>○道徳に関するアンケートで、肯定的な回答をした教師が90%以上</p> <p>○自分や友達のよさを見つめる時間を各学級で実施した回数、学期に1回以上</p>	<p>○道徳科の授業づくりについて、全職員で考える場を設ける。 ・自分や友達の良いところを見つめる時間や児童が振り返る場を設け、振り返りの記述を道徳科の授業等に生かす。 ・授業と日常生活を意識して関連付ける。</p>	A	・道徳科の授業づくりについて、全職員で考える場を設ける。 ・自分や友達の良いところを見つめる時間や児童が振り返る場を設け、振り返りの記述を道徳科の授業等に生かす。 ・授業と日常生活を意識して関連付ける。	A	・どの学級も落ち着いた学習態度で、友達との関係も良好だと思う。 ・道徳教育は本当に大事なので、思いやりの心を育てため、今後も期待している。
	<p>●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実</p>	<p>○いじめやいじめにつながる行為の有無について、職員間で共通理解を行う場を実施した回数、月に1回以上</p> <p>○いじめ防止等について組織的対応ができていると回答した教師90%以上</p>	<p>○いじめの定義、いじめ防止等のための取組等について、年度当初に全職員で共通理解する場を設ける。 ・毎月、こころのアンケート調査を行い、いじめ等の問題発見を行う。 ・いじめの認知、認知に関する対応マニュアルをもとに、問題が発生したときの即時対応を行う。</p>	B	・いじめに関して職員間で情報交換し、共通理解する機会を月1回以上実施できた。いじめ防止等に関する組織的対応ができていると評価する教師は95%であった。次年度も共通理解の場の確保と組織的対応の強化を図っていく。	B	・アンケートの実施、その後の職員間での話し合い等よく取り組まれている。 ・多忙な中とは思いますが、事業が増えたときも職員間の連携を図り、組織的対応を続けてほしい。
	<p>●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。</p>	<p>●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童80%以上</p> <p>●「将来の夢や目標を持っている」と回答した児童80%以上</p>	<p>・学年、学級、委員会、クラブなど様々な集団での活動の中で、児童一人一人を多くの職員で見守る体制をつくる。また、生徒指導協議会等で児童の情報を共有し、共通理解した上で、個に応じた適切な指導、支援を生かすようにする。 ・年度当初、児童一人一人が目標ややりたい姿を設定させる。様々な年齢や職業等の人々との出会い、交流する活動を実施し、活動後や学期末に現在の自分を振り返る場を設ける。その中で、児童個々の成長を価値付け、児童自身がよいところを実感することができる機会をつくる。</p>	B	・児童へのアンケートでは、90%の児童が先生からよいところをみとめてもらえていると感じていた。また、79%の児童が将来の夢や希望をもつことができている。おおむね成果指標を達成できた。なりたい自分を考える、選択する場を取り入れた実践を更に強化させたい。	B	・児童の夢を膨らませることができるこの時期に、いろいろな体験をたくさんさせてほしい。 ・児童の小さな善行や教師の承認が、活動意欲や向上心につながっている。児童一人一人のよさが生かされることで、教育活動が更に効果的になると思う。組織的に継続した取組を期待している。
	<p>○児童にとって居心地のいい学校となるための教育活動</p>	<p>○「友達に思いやりをもって接している」と回答した児童90%以上</p> <p>○「安心して学校に通うことができる」と回答した児童90%以上</p> <p>○学級や児童の実態を踏まえ、UD化を意識し、学びやすく過ごしやすい授業や環境づくりを行ったと回答する教師90%以上</p>	<p>○「友達に思いやりをもって接している」と回答した児童90%以上</p> <p>○「安心して学校に通うことができる」と回答した児童90%以上</p> <p>○学級や児童の実態を踏まえ、UD化を意識し、学びやすく過ごしやすい授業や環境づくりを行ったと回答する教師90%以上</p>	<p>・人権集会や学級活動等において、「ほかほか言葉」、「友達の良いところ見つけ」、「違いを認める」について必ず取り扱い、全職員、全校児童で共通理解した上で高次の取組を行う。 ・「11月のこころのアンケート」とともに、こころのポストを設置し、児童の状況に応じた相談の窓口を広げる。 ・ふれあい道徳を実施し、保護者や地域の方にも道徳科の授業を含め、本校の道徳教育への理解を促す。 ・教育のUD化(インクルーシブ教育)の推進を図る。</p>	B	・児童へのアンケートでは、93%の児童が友達に思いやりを持って接していると考えている。また、88%の児童が安心して学校に通うことができていると答えている。教師へのアンケートでは、全ての教師が教育のUD化を意識し、児童にとって学びやすく過ごしやすい授業、環境づくりを行っていると考えている。数値目標はおおむね達成できたが、困っている児童が出てくる現実を省み、次年度も学校教育全体で更に取組を強化していく。	B
●健康・体づくり	<p>●「運動習慣の改善や定着化」</p>	<p>●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童70%以上</p>	<p>・自力登校を促す。 ・児童が自身の運動習慣を確認する「生活チャレンジカード」記入の取組を、6月、11月に実施し、児童に自己の生活習慣を振り返らせ、改善を促す。 ・教師同士で、体育科のワークシートや授業の進め方を共有できるようにし、好事例について相談、推進できる場をつくることで、児童の運動への意欲向上を図る。</p>	A	・成果指標の達成状況について、各学年から抽出した学級アンケートの結果、約78%であった。中間評価時の伸びが見られることから、具体的な取組が功を奏していると考えられる。次年度も、運動週間の改善、定着に向けた取組を推進していく。	A	・教師と一緒に遊ぶ児童の姿が印象的である。元気な声がいっぱい聞かれる。児童はよく遊び、運動を通して体力以外のことも多く学び、身に付けている。 ・地域の方々や体育の授業に参加した。児童が自分で考えて取り組んでいたのが素晴らしい。
	<p>●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」</p>	<p>●「健康によい食事をしている」児童80%以上</p>	<p>・児童が自身の食習慣を確認する「生活チャレンジカード」記入の取組を、6月、11月に実施し、児童に自己の食習慣を振り返らせ、改善を促す。 ・給食時間、給食レングラフを使った食への関心を高める活動に取り組む。 ・保護者参観日に食育の授業を積極的に実践したり、給食だよりで情報発信したりして家庭への啓発を図る。</p>	B	・児童の委員会活動や学校図書館とのコラボ給食など、食への関心を高める活動を継続的に実施できた。1月末時点で、健康に良い食事をしていると回答した児童は、89.9%で数値目標を達成することができた。次年度も取組を継続したい。	B	・児童への食への関心を高める活動を、継続的に実施されている。 ・「よく食べ、よく遊び、よく寝る児童を育てたい」という教師の熱い思いで食育にも積極的に取り組まれている。 ・食物アレルギーを有する児童への配慮や対応など、先生方の苦勞が有り難い。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	<p>●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減</p>	<p>●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。</p>	<p>・教職員一人一人の退勤目標時刻だけでなく、各学年グループ等でもを設定し、放課後の時間を効率的に使った業務執行、同僚性を発揮した業務改善を意識する。 ・分掌事務等の内容について、「目的」や「効果」、「ニーズ」等の観点から見直し、変更や削減につなげる。 ・校内研究の在り方を見直し、作成に膨大な時間のかかる「要項」の原稿作成を削減し、指導案作成や授業づくりに注力するようシフトさせる。</p>	C	・校内研究の在り方については、研究主任、教務主任のマネジメントの下で見直した計画を実施できた。1月までの教職員の時間外在校時間は、対前年比で削減できているが、成果指標である教育委員会規則の上限を遵守した職員は約半数である。長期休職者や緊急対応の発生を予期したリスクマネジメントを強化する必要がある。	C	・勤務体制の改善は、喫緊の課題である。対前年比で改善できてきているので、継続して取り組んでほしい。 ・業務の効率化だけを見ると難しい面もあるが、職員の働き甲斐のある職場づくりも大切である。学校の特性、使命を考え、教師の効率的な資質向上へ取り組まれることを期待している。
	<p>○会議等のDX化と時間のマネジメント</p>	<p>○勤務時間内において自身の校務事務に取り組める時間が増えたと回答する教師70%以上</p>	<p>○会議等の予定時間を、事前に明示し、参加者が時間を意識して臨む。 ・会議資料等は可能な限りデジタルデータで事前に配布し、資料説明の時間を削減することで、協議、検討の時間を確保し、効率的に進める。また、会議録や事後連絡をデジタル版の校内掲示板に掲載し、確認、情報共有を円滑化する。</p>	B	・アンケートでは、72%の教師が成果指標に対する時間が増えたと答えている。DX化が一様効果を生み出したが、時間外在校時間と照らし、退勤時刻には反映されていないため、目的と必要性、職員のライフバランスなど総合的に見直しを。	B	・会議の在り方考え、事前に準備をして短時間で取り組む習慣を身に付けたい。意識することで更なる知恵を出せると思う。
●特別支援教育の充実	<p>○合理的配慮の提供を意識した、個に応じた指導、支援</p>	<p>○配慮を要する児童について、保護者、教職員、関係機関等と連携を図りながら、よりよい支援の在り方や具体的な支援方法を探ることができたと回答する教師90%以上</p>	<p>・教師相互による授業参観の際に、児童に寄り添ったUD化が図れているか等の観点からの意見交換を取り入れることで、専門的知識や個に応じた指導についての理解を深めていく。 ・個別の支援計画の評価、修正を行い、個に応じた支援や学校全体の指導等の方向性を共有し、連携しながら指導、支援を行う。</p>	A	・アンケートでは、95%の教師がよりよい支援の在り方や具体的な支援方法をさぐることができたと回答した。合理的配慮の提供についての断続的な研修や、日々の実践事例の交流等が、教師各々の意識向上へつながっていることがうかがえる。	A	・年間で、特別支援学級との情報交換の場を定期的に設けられていて、その中で合理的配慮の提供の重要性が共有されている。 ・特別支援学級とこども園との交流など、継続的な活動が行われている。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
				◎志を高める教育	<p>◎つながりの中で自信をもつ子の育成</p>		
○挨拶・掃除指導の充実	<p>○挨拶、掃除の場で「自己指導能力」の育成</p>	<p>○自分から挨拶していると回答する児童90%</p> <p>○掃除の時間に、自分ができることを見つけて頑張っていると回答する児童90%以上</p>	<p>・児童会の委員会活動「生活上委員会」による挨拶運動の推進するとともに、希望者を募った挨拶運動を実施する。 ・あいさつカードによる全児童への啓発を行う。 ・掃除の指導動画を活用し、掃除の時間によりよく活動できるよう指導する。 ・チャイムによる掃除時間の明確化と確保を行う。</p>	B	・アンケートでは、自分からの挨拶は89%、掃除の時間の自発性は94%の児童ができていたと答えている。おおむね目標を達成できた。児童が挨拶、掃除以外でも意識できるよういづれ、「自分からの」2点を重点ポイントに挙げ、ほめる、価値付けを意識した指導を継続していく。	B	・挨拶や掃除を通して、児童の気持ちいいという感情を大切にしたい取組となっている。学校が明るくなる。 ・学校の挨拶の取組が、学校外での挨拶に波及していくことを願っている。

5 総合評価・ 次年度への展望	<p>●…果共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育</p> <p>・全職員の共通理解のもと、児童の学びに係る授業の実践研究と教師の学びに係る教師研究に取り組んだことで、教師一人一人が自身の指導を振り返り、より児童の学びが高まる実践に移すという教師集団が育ってきた。また、その成果を集めて冊子「HONJO COMPASS」を作成し、継続した実践に向けた基礎ができた。次年度は、実践研究を継続しつつ、その効果を、児童の学習意欲と結びつけて検証していく。</p> <p>・児童が共に安心して通える学校環境づくりを推進し、1年を通して児童の心理的安全性を高めることができてきたが、全児童の安心までには至らなかった。次年度は、教師だけでなく児童間でも「褒める」「認める」取組に重点を置き、児童の自己肯定感、学習意欲、向上心の高まりへと誘う活動へと充実させていく必要がある。</p> <p>・挨拶・掃除に重点を置いた取組は、共に高め合う本庄っ子の育成に効果が見られた。次年度は、校内にとどまらない取組となるよう、コミュニティスクールを生かした地域の方や保護者を巻き込み更なる効果を模索していきたい。</p> <p>・業務改善・教職員の働き方改革の推進については、校内研究の在り方や行事内容の見直しにより、ここ数年改善できているが、目標達成には至っていない。学校マネジメントや分掌部にも見直しの視点を広げ、より効率的な働き方ができる職場づくりを模索する必要がある。</p>
--------------------	---